

CONTENTS

地域会だより 1

連載【隔月 全6回】「環境建築」その先へ
第1回 - 環境シミュレーション建築デザイン実践ガイドブック - 2
川島 範久

連載:BIM が切り開く新たな創造性
第5回 ~ 村井 一氏インタビュー ~ 4
横関 浩

三重発 ~ 森羅万象匠塾/2022 Study Session4~
「暮らしから建築へ」 富田 崇氏 講演会 5
山本 寛康

私の仕事 08
自分史の建築を語る 6
西井 信幸

自作自演 257
ペーパーナイフ 6
中村 慎吾

保存情報 第257回
データ発掘: 苗木城跡 7
山上 薫

編集後記 7
原 眞佐実・恒川 和久

JIA建築家大会2023東海in常滑:開催記念特集 01
常滑の街歩き 8
浅井 裕雄

地域会だより 今後の予定

- JIA東海支部
・6/30 第1回支部役員会
- JIA静岡地域会
・6/15 静岡地域会役員会の開催(WEB同時開催)
- JIA愛知地域会
・6/16 賛助会 企業PR会
・6/16 第1回役員会
- JIA岐阜地域会
・6/20 第2回役員会: 18:30~20:30
- JIA三重地域会
・6/16 第1回例会(WEB同時開催)
会場: みえ県民交流センター
ミーティングルームA・B(アスト津3階)
・7/8 建築ウォッチング in 大阪・中之島

お詫びと訂正

ARCHITECT 5月号 表紙と目次ページに記載したお名前の漢字に誤りが
ありました。

誤:水谷 章啓 → 正:水谷 晃啓 お詫びして訂正致します。

表紙 常滑の景色……③「常滑様式」

常滑の街を歩いていると、赤茶けた「塩焼き」の土管をよく目にします。やきもの散歩道にある土管坂のように擁壁のかわりに壺や土管をつかって造成をして、この街は、やきものによってつくられています。表紙は、リノベーション現場のワンカット。床を剥いで見ると柱の基礎に土管が使われていました。これを「常滑様式」といいます。



浅井 裕雄 (JIA愛知)
裕建築計画

環境シミュレーション建築デザイン実践ガイドブック

はじめに

昨年5月、長い時間をかけて執筆に取り組んできた著書『環境シミュレーション建築デザイン実践ガイドブック—自然とつながる建築をめざして』が刊行された(図1)。設計実務を経て、東日本大震災を契機にカリフォルニア大学バークレー校へ留学した私は、環境シミュレーションやそれを活用した建築デザインについて学び、それらを体系立てて整理する必要性を感じていた。そこで帰国後は東京大学大学院の博士課程に進み、環境シミュレーションを建築デザインに活用するための背後の理論や、それを活用した設計プロセスに関する研究を開始した。その後、建築設計事務所を開設計し、小さな住宅から設計活動を再スタートし、上記の設計プロセスの実践に取り組んだ。この「理論」と「実践」とをまとめたのが本書である。今回はこの本について、どのような経緯で、どのような思いで書いたのか、他の本と何が異なるのかを紹介したい。

環境シミュレーションの歴史と現状

環境シミュレーションの歴史を遡ると、1960年代の米国に1つの源流を見出すことができる。米国では60~70年代に熱負荷計算の分野でコンピュータによる解析の基礎研究が始まり、やがて1990年に入ると、一般の建築設計者でも容易に扱えるインターフェースを持つソフトウェアが登場しはじめた。近年では、コンピュータ性能の急速な向上とも合わせて、かつては把握が難しかった「自然」を建築に取り込むことの影響を解像度高く把握することも可能となってきた。さらにCAD・BIMとの連携、近年ではVPL対応などが進められ、環境シミュレーションへの期待はますます高まってきているように思う。しかし、実際にこれらを使ってみると、具体的にどう建築デザインに活かせばいいのか困惑してしまうことが多いのも事実であり、環境シミュレーションを活用した設計プロセスについて、具体的に解説した本の必要性をかねてより感じていた。

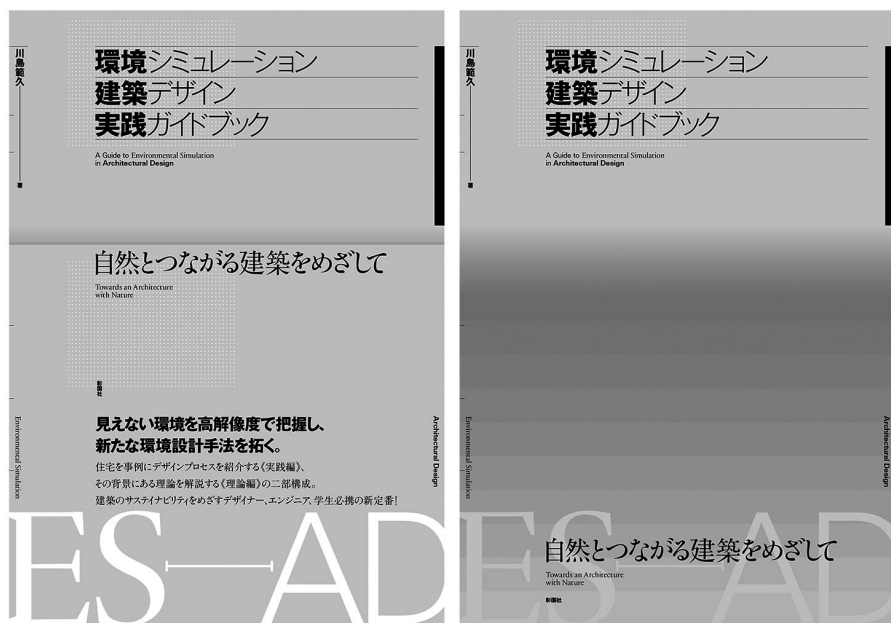
具体的な設計プロセスを提示する「実践編」

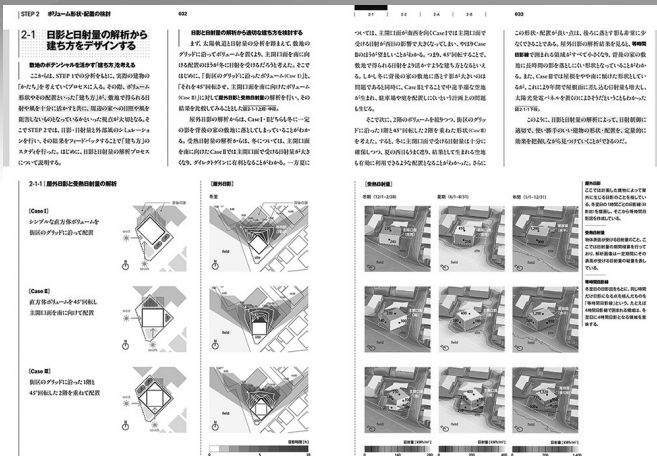
本書は、前半の「実践編」と後半の「理論編」の2部構成とし、前半の「実践編」丸々を住宅1事例の設計プロセスの解説に充てた。どのフェーズでどのような解析モデルを作成し、どのような設定で解析を行い、解析結果をどのように設計にフィードバックしたのか、といった一連のプロセスをできるだけ具体的に提示することを目指し、敷地の気候分析から始まり、ボリュームの検討、内部空間の検討、外皮や設備の検討、さらには運用後の環境実測に至るまでを5ステップに分けて解説した(図2)。加えて、本書で行った各ステップの解析について、解析モデルとその設定の詳細を全て公開しているのも特筆すべき点かと思う。環境シミュレーションに取り組みたい学生や実務者から「とりあえずRhinoでモデリングしてみたが、どう解析すればいいか?」などと聞かれることが多いのだが、実は解析モデル1つを取っても、設計フェーズや検証したい内容によって求められるモデルは異なるのである。本書で示したのは住宅の事例であるが、こうした検証の流れや内容はどのプロジェクトでも概ね共通であり、他のプロジェクトへの展開も可能である。

背後の理論を概説する「理論編」

一方、環境シミュレーションを建築デザインに活用するためには、「背後にある理論」への理解も重要である。環境シミュレーションは、建築設計の大きな助けとなる一方で、その原理を理解しないままの安易な活用は、誤ったフィードバックを建築設計に与えかねないからである。しかし、理論的なことを学ぼうに

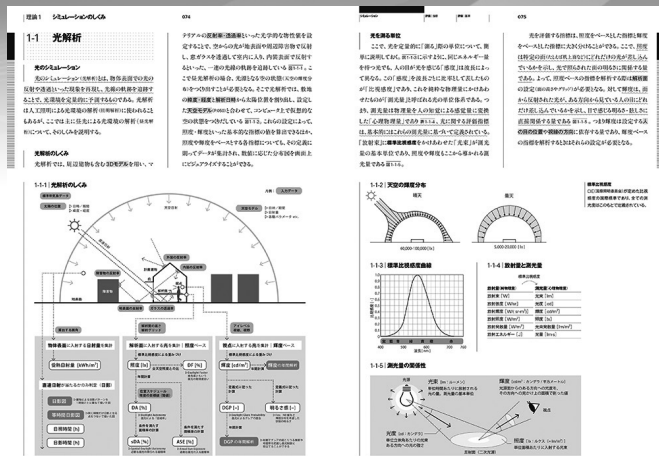
図1:表紙





も、従来の専門書では建築デザインを志向する人にとっては専門的過ぎる内容も含まれていて全体像が掴みにくかったり、文字や数式ばかりの記述に辟易し、挫折してしまったりする人も多かった。そこで本書後半の「理論編」では、「シミュレーションのしくみ」と、その結果を評価するための「指標と基準」という、従来の環境工学の教科書とは異なる2つの切り口で理論を整理し、図を多用した直感的な解説を行っている。建築設計の実践者の立場から、建築デザインと関連が深いと思われる理論にフォーカスすることも心がけた。

「シミュレーションのしくみ」パートでは、どのようなモデリングが必要で、どのようなデータをインプットすると、解析を通じてどのようなデータがアウトプットされるのかについて概説している(図3)。例えば光解析に関しては、解析日時や天空モデル、各素材の反射率/透過率といったデータをインプットすることで、照度や輝度をはじめ、昼光率やDA (Daylight Autonomy) など様々な「指標」で結果をアウトプットすることができる。では、どの指標でどのような内容が評価でき、法律や制度などで、どのような数値基準が示されているのだろうか。それについて説明したのが「指標と基準」



パートである。以上のような理論を体系的に理解することで、建築環境に影響を与える要素は何か、それをどう変更すれば環境はどのように変わるのか、ひいては、よい建築環境をデザインするにはどうすればよいのか、といったことが逆算的にわかるのだ。

本当のサステナビリティのために

本書は、「自然」の中でも主に太陽光や自然風を対象とし、「建築デザイン」としては、建物の形状や配置、窓や間取りといった部分を主に扱った。これらは主に、建築を「エネルギー性」の面から見直す方法だったと言える。しかし、本当のサステナビリティ(持続可能性)の実現に向けては、これらの検証だけでは不十分である。その建築が、求められる用途に対して使いづらかったり、その求められる用途が変わった途端使いものにならなくなったりするようでは、使い続けることは難しくなる。また、なによりも、その建築が人に愛されていないければ、どれだけ性能が高い建物だとしてもいずれ壊されてしまう。

本書で紹介した、環境シミュレーションで見えない環境を数値解析し可視化する方法は、建築デザインをより良いものにディベロップさせる強力な武器にな

るだろう。しかし、注意しなければならないのは、光・風・熱といったものは、上記で述べたような事象と比べれば数値化による科学的分析がしやすいものである、ということだ。見える化しづらいものもあるということも認識し、見える化できるものだけで物事を判断しないようにすることも重要である。こうした認識のもと、本書で紹介した方法を活用していただけたらと幸いである。

最後に、なぜ私がこのような本を執筆するに至ったのか、その最大の動機について紹介したい。UCバークレーから帰国する際、ダイナ先生から以下のことばを贈られた。

“Sharing information and technology for a better world is Berkeley's DNA !”

より良い世界に向けて必要な情報や技術をシェアするのがバークレー精神。サステナビリティに関する情報や技術は、より良い世界の実現のために広く社会でシェアされるべきもの。このような考えに共感し、これまで学んできたことを、広く社会に還元していきたいと考え、本書を執筆するに至った。ぜひ多くの方にこの本を活用していただき、より良い建築をつくっていただきたい。

川島 範久 KAWASHIMA Norihisa

建築家。川島範久建築設計事務所代表取締役。明治大学理工学部建築学科准教授。1982年生まれ。2005年東京大学卒業。2007年東京大学大学院修士課程修了後、日建設計勤務(2014年)。2012年、UCバークレー客員研究員。2016年東京大学大学院博士課程修了、博士(工学)取得。2017年川島範久建築設計事務所設立。

明治大学 准教授
川島範久建築設計事務所 代表取締役
建築家 川島 範久



～ 村井一氏インタビュー ～

BIMの三分法の提唱者、村井一建築設計/東京大学生産技術研究所 特任助教の村井一氏にBIMと創造性についてインタビューを行いました。BIMが切り開く新たな創造性第5回はその内容をお伝えします。



村井一建築設計 / 東京大学生産技術研究所 特任助教
村井一 Murai Hitoshi

撮影:青木 大

横関:今日はBIMが切り開く新たな創造性についてお話を伺いたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

村井:よろしくお願いします。

<BIMどう説明するか?>

村井:私は前職での組織事務所でもそうだし、独立してからも、「BIMとは何なのか?」と聞かれることが多かったのですが、さっと答えられるものがなかなかなくてですね。もちろん用語としてはBIMとはワークフローであるとか、プロセスの変革であるとか、とても聞こえのいい言葉なのですが、それだけでは伝わらないかなと思っていました。

村井:ちょうど東京大学生産技術研究所で野城智也先生の声かけではじまったBIMの研究会(RC-90「つなぐBIM」研究会)がありまして、いろんなBIMの取り組みの発表をさせていただいたり、ディスカッションをしていました。研究会が数年たったところで、ひょっとしたらBIMの基本的な性質は三つぐらいに分けられるんじゃないかと自分の中で考えがまとまってきました。設計者として、情報の取り扱いにおける仮説をたて、研究会の中で様々な設計事務所、ゼネコン、メーカー

さんのお話を聞きながら、これで概ね説明できるんじゃないかとまとめ始めたのがきっかけだったんです。

村井:話は前後しますが、研究会では建築情報のとらえ方、集め方、使い方について参加者間で議論を行い、冊子(※1)をつくらたりして活動をしていたわけです。その報告書の中では、BIMというのを10個のキーワードで切り取りました。BIMの費用対効果、もっと広義な効果の話をしていて、昨今はライフサイクルのお話だとか、BIMを支えるプレイヤーとはどういう人たちののか、その後試していくためのパイロットプロジェクトはどうあるべきだとかですね。これは5年前の話なので内容は古くなってるかもしれませんが、話していたことの真意はあまり大きく変わっていないだろうと思います。ただ、これもBIMを事実として出てきたものを説明はしているのですが、BIMを仕組みとして取り扱おうと思った時には、この説明ではどうしても足りない部分があると思っています。それをこの3つぐらいの要素に分けると説明しやすいだろうということで作ったんですね。

<BIMの三分法>

村井:『ビルディング』『インフォメーション』『モデリング』の3つの言葉を2つずつ足し合わせていくと『ビルディングインフォメーション』『ビルディングモデリング』『インフォメーションモデリング』の3つの概念ができる。実際BIMを触ったり、BIMではなく2DCADであっても、設計情報をまとめていこうとする人は、恐らくこの3つの概念を取り扱っているだろうと思います。つまり形状を入力もしくは記述し、その形状に付随する属性を与え、それらをきちんとつなぎ合わせて伝達するためのモデリング方針ですね。

村井:これは多分、BIMであれば集計表を作ることであったり、それぞれ入れた属性情報を組み上げて反映するということなんですけど、2DのCADでも、今までのいわゆる一般図があり、詳

細図があり、仕様書があるというような関係を通してチェックする図面計画が、BIM以前にあるわけです。この感覚は多分この3つとあまり変わらなくて、デジタルに実装したものがBIMであるということなんです。最初のこの根っこの概念をちゃんと共有しないといけないんです。形を作り、属性を与え、それらをモデリングしていくということですね。

横関:つまり構造はBIM以前と変わらないということですね。

<基本構造はBIM以前と変わらない>

村井:はい。本質的に変わらないということだと思います。あたかもその構造自体が基準から大きく変わるような話になりがちなのですが、根っこは大きくは変わらないんです。今日はその先の変革についてのお話しになるとは思うのですが、そこをうまく説明をしないといけないかなと思います。

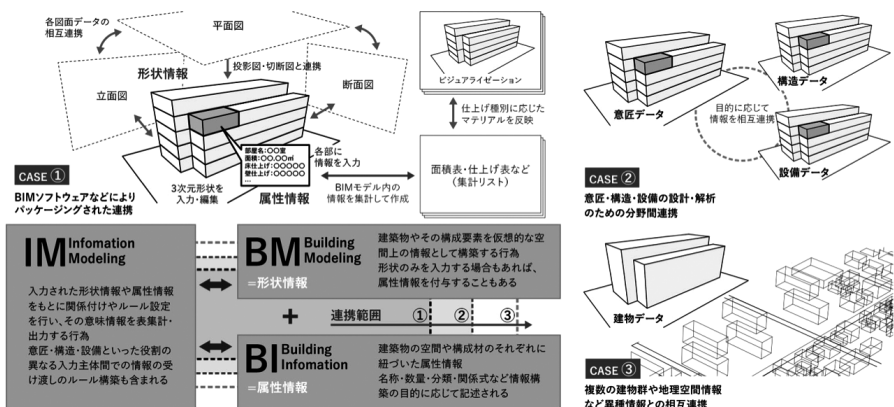
横関:そうですね。今、お話を聞いてすごく大事ななと思ったのは、ついついBIMと言うと設計の仕方が根本から変わるとか、3Dから図面を切り出すだけでやり方が逆転するとかいうイメージで、障壁を作ってしまう可能性があるんですが、この説明なら「ベースは変わってないですよ。ただやり方がちょっと新しくデジタルになっているだけです。」と。そういう説明の方が受け入れやすいかもしれないですね。

村井:日本語で分かりやすく説明しようとする、「順番は変わるかもしれない。順番は変えられるけど、根本的な仕組みは変わらない部分があるんだ。」ということですね。ですから、BIMは設計プロセスの変革であると謳われがちですが、変わらないものは建築情報の基本的な仕組みだと思うんです。仕組みを支える順序は変えた方がいいかもしれませんが、仕組みを支える道具も新しいものを使った方がいいかもしれない。仕組みを支える人にも変化があるかもしれませんが、やっぱり建築物ってとても寿命の長い人工物なので、その仕組みには変わらない価値があるんですよね。

インタビューの続きは、↓以下のアドレスからご確認くださいませ。



<https://flowworks.jp/bim-creativity-5/>



●BIMの三分法と情報の連携範囲

横関 浩 (JIA愛知)
スタンスアーキテクト
フローワークス



(※1) <https://bit.ly/3BKCoHW> より引用

「暮らしから建築へ」

●講演者: 富田 崇 氏

●開催日: 2023年 3月 10日

令和5年3月10日(金) JIA三重地域会の会員研修会が開催された。東海地方で活躍している建築家の“生きた”お話を聞く全4回の連続企画で今回はその最終回にあたり、自己研鑽の為に三重会が開催している「森羅万象匠塾」と兼ねた企画だった。講師は愛知県を中心に活躍されている建築家の富田崇氏で「暮らしから建築へ」が今回の講演のテーマ。名古屋芸術大学、名古屋モード学園を始め企業向けにも講師をされている人物なので、どんな話が聞けるのだろうと期待が膨らんだ。

結論から述べると、何度も建築家の講演を聞いた事はあるが、私は、今回ほど講演中に笑った経験は無い。もちろん、良い意味でこう書いている。それほどまでに富田氏の話とその人柄は、聴講者の心をつかむ内容であったのだ。

話の序盤、落ち着いた口調で、若くして事務所を立ち上げたと思うように経営が出来ず苦汁を嘗めた経験、それから十年ほどの間に携わった設計案件の紹介など、壮年期に至る紆余曲折を赤裸々に述べられた。これらの話に聴講者は少なからず共感を抱いたことだろう。40歳を目前にこれまでの人生を振り返り「10の仕事」を自身の根幹と位置付けた。「10の仕事」について、詳細は紙面の都合で割愛させて頂くが、その説明の為に会場のモニターに映されたいくつかのキーワードを見た時、私は好奇心を鷲掴みにされた。『…古墳、マルシェ、お茶』これらは一見、建築設計に直接関連は無さそうなのだが、どういう事なのか。それらについての説明が富田氏から語られると「富田崇」という人物が、建築家という肩書きで語るにはあまりにも奥行きのある深い事を感じずにはいられなかった。

「古墳は横から眺めるのが好きですね。」そう語る富田氏の表情には笑顔が浮かんでいた。我が国における建築物の寿命の

短さに比べ、古墳(日本史上、古墳時代に築造されたもの)は築造から1500年ほど経過しても、未だそこに存在している。そのことに心を惹かれると共に、良質な地盤の土地を直感的に古墳の築造地として選定した古代の人々の凄さに感動するのだそう。確かに、このような感情を抱く人もいるだろう。しかし、富田氏はそれに留まらない。片手で持てるほどの小さなブリキの缶を取り出し、氏が聴講者に見せてくれたのは、粘土で作った古墳丘の模型だった。

「好きなものを忘れたくないんです。学生の頃から記憶力が良くない。こうして、缶の中に粘土の模型を入れておけば、蓋を開けた時いつでも思い出すことが出来るでしょ。」

富田氏によれば、これは記録、氏なりの記憶の保管法なのだ。好きが高じ、夏休みの自由研究の手伝いとして、ある小学生と共に古墳へピクニックに行ったというエピソードが紹介されると、会場の所々から笑い声が上がった。

「マルシェに参加することもあります。直接お客さんと話が出来るところを作りたい。マルシェでは建物のペーパークラフトをずるんです。『マイホームが200円で建ちますよ』って言ってね。」

これらの活動をきっかけに新しい知人が増え、人間関係が広がっていくのだそう。なるほど、一見は趣味の世界なのだが、それらの活動全てがアンテナとなって、富田氏を取り囲んでいる。10の仕事の一つ一つが建築家としての仕事に集結し、建築家「富田崇」を作っているのだ。

数多くの楽しいエピソードの紹介の後、富田氏は会場の聴講者にお茶(チャイ)を振舞ってくれた。目の前に並んだ器から、手慣れた手つきで数種のスパイスを鉢に取り出し、細かく潰す。スパイスを入れた鍋の水が沸騰すると、上品な香りが会場に



お茶(チャイ)を振る舞う 富田 崇 氏

漂った。お茶の淹れ方講座も開催している富田氏、自身が講師を務める学校(建築の)で、生徒たちにお茶を振舞うこともあるのだそう。お茶は心と心を近付けるコミュニケーションツールだと氏は語る。こうして、研修会の最後は、お茶を飲みながらの談笑で和やかに締めくくられた。

「自分を取り巻く全ての事象、色々な体験が建築に繋がっていくんですよ。今日はあまり建築っぽくない話ばかりだったけれど、ちゃんと建築の仕事もしていますよ。」お茶を淹れながら語る富田氏の照れ笑いがとても印象的だった。



山本 覚康 (JIA三重)

山本一級建築士事務所

自作自演

私の仕事

08

自分史の建築を語る

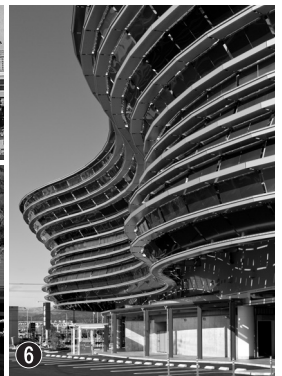
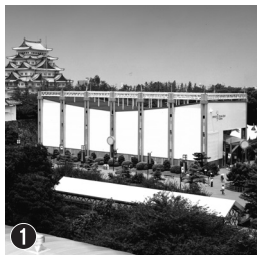
事務所を設立して35年目一建築家の創作期間が40年余りとするすでにその八合目を過ぎたことになる。

その中—300棟近い設計の中で、いくつかの自身の建築の記憶をとりあげたい。

①は、独立した1988年に、世界デザイン博で電通とJVにて建築設計を担当した名古屋市館—現在の出発点となっている。

②は、自身の出身地・伊勢古市の参宮街道資料館で、お伊勢参りのあとの精進落としての遊郭の資料を集めた記念館である。

③は、1994年ある企業の研修所とオフィス—ヤマタケサークルズで、企業の和をメインに木・RC・S造の混構造で設計し、その年の日本建築学会東海賞をいただいた。



④は、2005年の愛知万博の仮設駅舎で、時間がない中で仮設のテントを使い雲のイメージで構成した思い出深い建築でもある。

⑤は、公募で選ばれた地元に近い鳥羽小学校で、従来のハーモニカ型普通教室を解体し、1学年ずつ2教室を平屋でコテージ風の木造でつくりあげた。

⑥は、東静岡の駅前に建つ、スーパーコンコルドというダイナミックな曲線の静岡で最大のPホールで、吸い込まれる建築として

現在も人々の目を引く存在となっている。

⑦は、公募型PFIで獲得した岡崎のこども発達センターで、発達障害のこどものための医療も備えた総合施設である。

以上7点の建築は、さらなる挑戦のための新たな未来への仕事=墓標ともなっている。



西井 信幸 (JIA愛知)

西井都市建築設計事務所

自作自演 257

学生時代にNagiMOCAで買ったペーパーナイフを今も使っています。先端を封書の口に差込み「しゅっ」と封を切る。



ペーパーナイフ

指でちぎっても良いのですが、原本が必要なメーカー見積もり等は、届いた封筒をそのまま分別のために用いることもあり、なるべくスマートに封を切りたい。形もさることながら、手に持った時に少しひんやりするのもどことなく気に入っている理由の一つなのかもしれません。

電子メールでのやりとりが当たり前になり、封筒で資料をお送りいただくことがめっきり減ったのですが、最近このペーパーナイフを使っていて気になり始めたことがあります。封を切ろうとしても、封筒にナイフの先端を差し込むことができるスキが全くないのです。封筒の口筋はしっかりと折られ、頭の全面に糊が張られ、完全に肩が塞がれているものがほとんどです。

仕方なく指で少しだけちぎり、ナイフを差し込みます。そうしたい気持ちは分かるのですが、そこまでしなくても中身は漏れることなく私の元へと届いています。

自分にも心当たりがあります。他人に押し付けがましい間違った言い方をいろいろと行ってしまふ。相手ににとっては「そこまでしてくれなくても分かっていますよ。」ということ。

相手が動きやすいようにほどほどにしないで、と思いつつながらこれからもこのナイフを使うでしょう。



中村 慎吾 (JIA愛知)

石本建築事務所



足軽長屋跡から見た天守展望台



天守跡の展望台



大矢倉跡



展望台からの眺望

中津川市街地の北を東西に流れる木曾川の右岸、標高432mの高森山の上に苗木城はあった。

築城したのは中世からこの地を治めていた遠山氏。明治4年(1871年)の廃城まで260余年遠山氏の居城であった。幕末期に1万石で城持ちの藩は苗木藩のみであるという。

頂上まで登ってゆくと、途中巨岩を利用した石垣や門の跡、わずかな平坦地には建物の礎石を見ることも出来る。

全体が花崗岩の岩山のため、造成が困難で、岩に穴をあけて柱を立て、斜面にせり出しながらつづら折状にやぐらや居館が並んでいたという。山頂には、京都の清水寺などに代表される「懸作り」の工法で、三層の天守(地上2階、地下1階)が建てられていて、岩石の頂上部に最上階があった。露出した巨岩には今も四角い穴が幾つも確認できる。

現在はその柱穴を利用し、天守閣の一部だけを柱や梁だけで組んで再現、展望台としている。

ここからは恵那山など木曾の山々と木曾川、中津川市街が織りなす360度の雄大なパノラマを楽しめる。

苗木城跡は戦国時代の面影を留めている山城として高い評価を受け、国史跡に指定されている。天然の岩山を利用した山城で、その独特の外観は全国的にも珍しいものである。

麓にある「苗木遠山史料館」には、苗木城の推定復元模型が展示されており、往時の全容をうかがい知ることが出来る。



【概要】

所在地 岐阜県中津川市苗木
指定 岐阜県史跡(1964年)
国史跡(1981年)

【参考資料】

案内パンフレット「苗木城跡」(中津川市2021年11月発行)
苗木遠山史料館 展示物

山上 薫 (JIA 愛知)

山上建築設計



編集後記

●連載の第5回目となる村井氏インタビューを読んで、BIMに対する考え方を変えなければと痛感している。社会人として設計を生業とし始めたころはT定規

で図面を描いていたが、現在ではPCでの2DCADやBIMにまで変化してきている。正直PCで設計をすることなど夢にも思っていなかった。彼のインタビューの後の方で“変わらないものは建築情報の基本的な仕組みだと思んです。仕組みを支える順序は変えた方がいいかも知れませんが、仕組みを支える道具も新しいものを使った方がいいかも知れない”という言葉があったが、この言葉には妙に納得させられたと同時に、BIMについてもう少し勉強してみようと思ってしまう。最近JIAの他支部の会員から三重塔をBIMで設計した案件を見せてもらう機会があったが、伝統的な建造物にこそBIMを使って

の設計が向いているのでは思う。BIMを使うことによってプレゼンがやり易くなるクライアントへの説明も容易くなるようだ。(原 眞佐実)

●今月号から、川島範久さんによる連載『環境建築』その先へ』が始まりました。環境シミュレーションを駆使した建築デザインについて、執筆されたご著書の背景となる事柄などをふまえて、『環境建築』がどこに向かって行くかを語って頂きます。先月号からは水谷晃啓さんによる連載「建築とデジタル技術の承前啓後」が始まり、今月で5回目の連載となった横関浩さんの「BIMが切り開く新たな創造性」とあわせて、『ARCHITECT』では、建築設計にまつわるコンピュータの活用について3つの連載を進めています。折しも、世の中ではChat GPT等のAIが世の中を変えるといった論調が盛んで、あらゆる分野で急速なデジタル化が進行しています。一方、「村井一氏インタビュー」では、BIMの最先端を走りながらも『根本的な仕組みは変わらない』と

の言葉が印象的です。毎回この連載では、1頁に納まりきらないインタビュー記事の何頁分もの続きをQRコードから読めるようにしています。ぜひ続きを読んで、これからのデジタル化と建築について考えてみてください。(恒川 和久)

ARCHITECT

第417号

発行日 2023.6.1 (毎月1回発行)

定価 380円(税込み)

発行責任者 大瀧正也

編集責任者 恒川和久

編集

東海支部会報委員会

愛知地域会プリテン委員会

株式会社イヅミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564)21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http : //www.jia-tokai.org/

常滑の街歩き

今年の秋JIA建築家大会2023東海は常滑を会場として開催します。会場エリアは大きく3ヶ所。メイン会場は坂倉建築研究所が設計、1983年竣工の「常滑市民文化会館」。次に各種会議やミニシンポジウムの会場予定のやきもの散歩道エリア。ここでは、「旧青木製陶所」、「旧丸利陶管」などの窯と周辺建屋をつかって会場とします。3つ目は、INAXライブミュージアム・陶芸研究所エリア。INAXライブミュージアムはタイル博物館をはじめ、土管工場の窯・煙突と建屋を資料館とし、おすすめのテラコッタパークではリアルな陶壁の展示が見られる。陶芸研究所は1961年竣工、設計は堀口捨己。ほとんど当時のまま使われており現在、登録有形文化財として国から答申されている。

3月16日、現地を確認しながら全国大会の企画を広げようと参加者約20名が常滑駅に集合し街歩きをスタートした。

最初に訪れたのは、メイン会場の常滑市民文化会館。文化ホールと公民館が一体となった施設で、大ホールには1,2階あわせて1180席ある。舞台は間口、奥行きとも



※1 旧丸利陶管窯の入り口



※2 旧丸利陶管の窯



大会案内チラシ

18mありオーケストラから演劇まで幅広く利用可。築40年のヤレ感はいないが、ホールそのものはしゃっきりしている。裏路地をぬけて旧丸利陶管へ※1、国際芸術祭ではシアスター・ゲイツの作品を始め多くの展示空間として使われていた。今も残る窯は耐震上の問題で会場としては使われなかったが未整備の建屋にある窯を見学したが、働く道具のような力強さは今も存在している。※2

旧青木製陶所は一部民間利用されている。2階部分の多くは開放されていて、窯周辺も展示などで使えそうだ。※3(こちらも国際芸術祭で会場として使用されていた)このエリアは古くから窯業が展開した理由の一つ、なだらかな地形がある。これが、「あな窯」を発展させた丘陵地帯。今も瓦屋根のつながる風景が望める。※4※5

最後のエリアへは、常滑の旧市街を通り抜ける途中に旧常滑市役所を発見、このあ



※3 旧青木製陶所窯の脇

たりは以前の街の中心地。和菓子屋などお店も残っている。

次にINAXライブミュージアム、休憩をはさんでテラコッタパークを見学し、丘の上

にある陶芸研究所へむかう。INAXの創設者である伊奈長三郎が同社の株15万株を常滑市に寄附、その運用資金をつかって陶芸研究所は建設された。現在も常滑市はLIXILの大株主である。建てられた場所は、常石神社の森の縁、奥条という。この地区には山車があり祭りが地域の人々をつないでいる。丘の上に陶芸研究所は常滑やき最盛期には黒煙の間に薄紫に浮かび上がっていたという。ここで、国際芸術祭のアーキテクトとして参加されていた山岸綾さんに常滑の会場探しやアーティストとのやり取

りの講演をお聞きして、常滑駅へむかい、大会での2次会場探しに散って街歩き終了となった。約17,000歩、大会当日は全ての参加者が歩くとは思えないが、歩くことで見つかるモノが必ずあると思う。



浅井 裕雄 (JIA愛知)
裕建築計画



※4 丘陵地帯の瓦屋根



※5 登窯窯 重要有形民俗文化財

